

# 左京七条一坊・八条一坊の調査

—第166次

## 1 はじめに

大和平野支線水路等その3（県営飛鳥2号幹線（右岸）その3）改修工事に伴う発掘調査で、奈良県教育委員会からの受託調査である。対象地は橿原市上飛騨町で藤原京左京七条一坊西南坪・同八条一坊西北・西南坪にある。工事区域は総長325.5mであるが、中央約130m分は既設管と新設管の位置が重複するため立会で対応し、同部分を挟んで北区（約155m）、南区（約29.5m）に二分して発掘調査を実施した。調査区域が長大となるため、北・南区は便宜的に図110のように小区に分割して記述する。全体の調査面積は約375m<sup>2</sup>で、2010年11月29日より調査を開始し、2011年3月3日をもって終了した。

## 2 北区の調査

**基本層序** 上から①造成土、②農業用水路既設管理土、③水田耕作・床土、④7世紀代の整地土（黒褐色～緑灰色砂質・粘質土）、⑤地山（青灰色～灰色粗砂および礫層、橙色シルト）の順である。地山の大部分は、水成堆積とみられる粗砂および礫層で、北1区では日高山丘陵の下部をなす橙色シルトの斜面に青灰色砂礫層が擦り付く様子が確認できた。7世紀代の遺構は、軟弱な地山の砂礫層上に一定量の整地土を施したのちに掘り込まれている。

ただし北区の大部分は、既設管の掘方と重複しており広範囲にわたって遺構面自体が失われていた。7世紀代の遺構を検出したのは北2区、および5区である。

### 北2区の検出遺構

**SX610** 一辺約70cmの隅丸方形の柱穴で、残存する深さは20cm程である。内部に柱痕が残るが、土圧により原形を保たない。埋土内から須恵器杯G蓋が出土した。

**SX611** 径約70cmの柱穴で、残存する深さは15cmである。西側の偏った位置に径25cmの抜取穴があり、均質な橙色粘質土で埋められている。

**SX612** 北側の大部分が調査区外にあり全形は不明であるが、SX611と同様に抜取穴の埋土に橙色粘質土が入る柱穴。SX611と一連のものである可能性がある。

**SX613** 一辺60cmの隅丸方形の柱穴で、検出面からの深

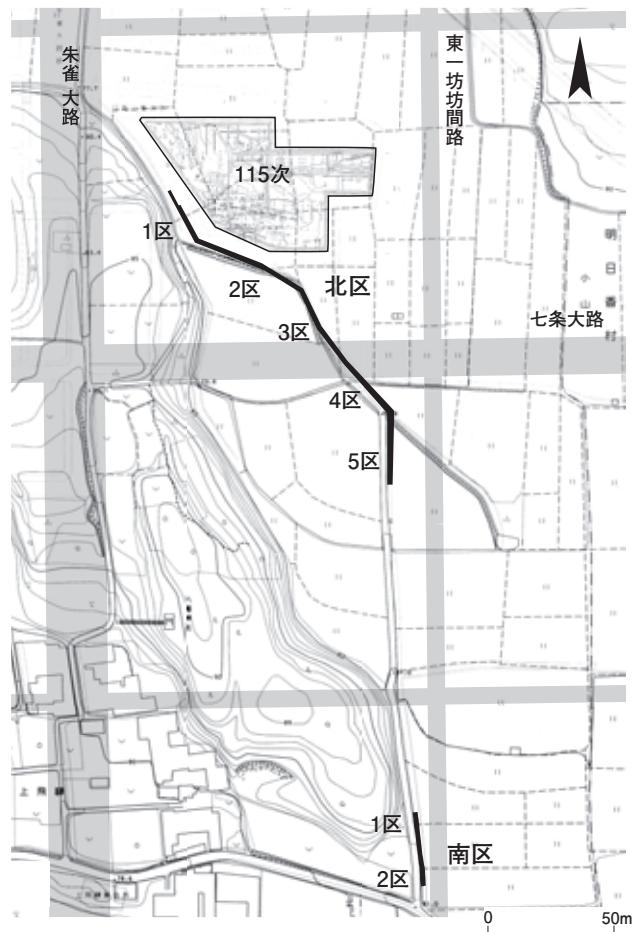


図110 第166次調査区位置図 1:3000

さは40cmである。南側の大部分が調査区外にあるが、断面で径30cm程の抜取穴を確認した。 (廣瀬 覚)

### 北5区の検出遺構

**SB614** 2間分を検出した。北で西へ約8°ふれる。掘方は一辺約55～65cmで深さ約30cm。掘方の形状は、北・南の柱穴が横長で、中央の柱穴が縦長である。東西棟建物の妻側にあたる可能性がある。埋土はオリーブ褐色粘質土に灰色粘土ブロックが混じる。柱はいずれも抜き取られており、抜取穴に木屑が入る点で共通する。SD620により削平される。

**SB615** 2間分を検出した。北で西へ約4°振れる。掘方は径30cmの円形である。

**SD620** 柱穴列の廃絶後、黒色粘質土による整地を施したのち、掘削する。東肩のみを約24m検出した。幅70cm以上、深さ20～30cmである。溝の北端部は北4区へは続かず、ここで途切れる、もしくは西へ折れるとみられる。下層に暗灰色砂質土が堆積し、その上部を暗褐色粘質土により埋める。暗灰色砂質土層より藤原宮期の遺物が出土した。八条一坊西北坪内を区画する溝の可能性が考えられる。 (小田裕樹)

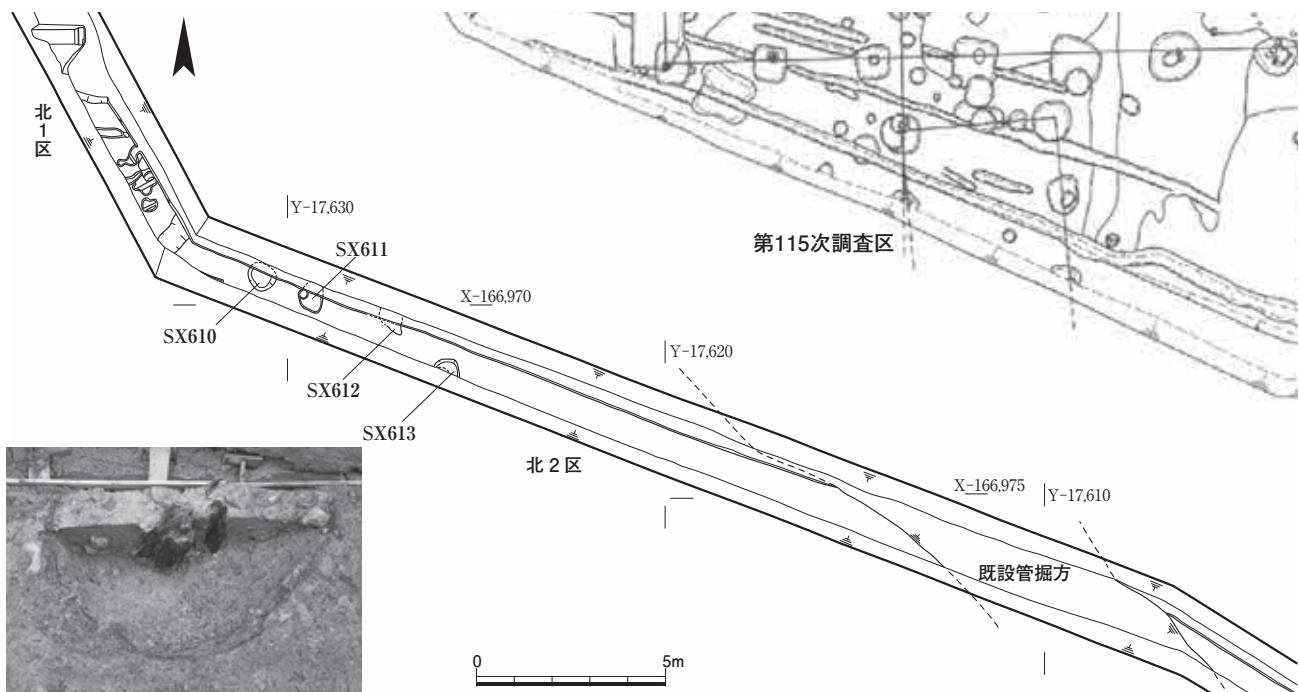


図111 SX610柱根残存状況

図112 北2区遺構図 1:200

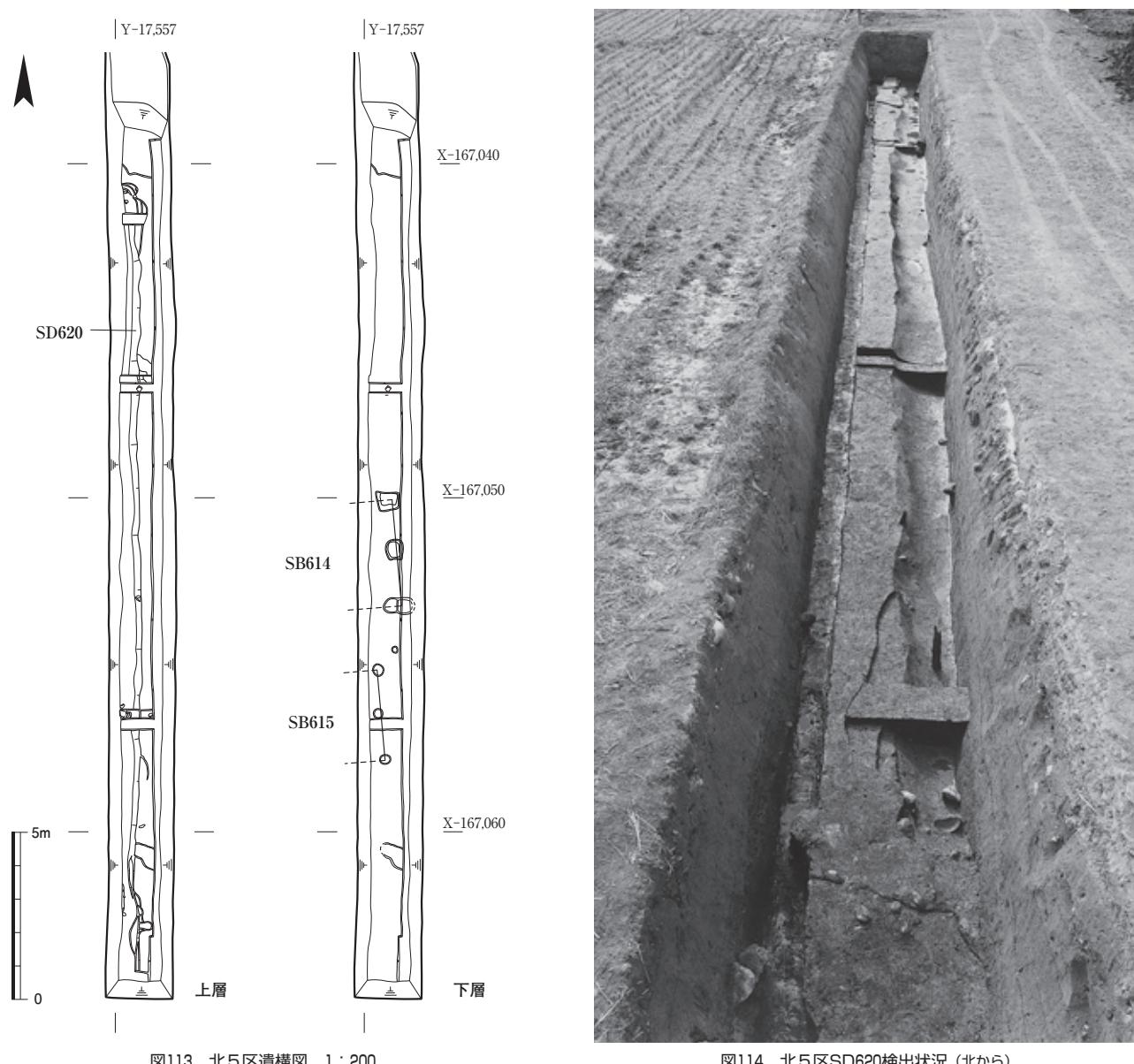


図113 北5区遺構図 1:200

図114 北5区SD620検出状況 (北から)

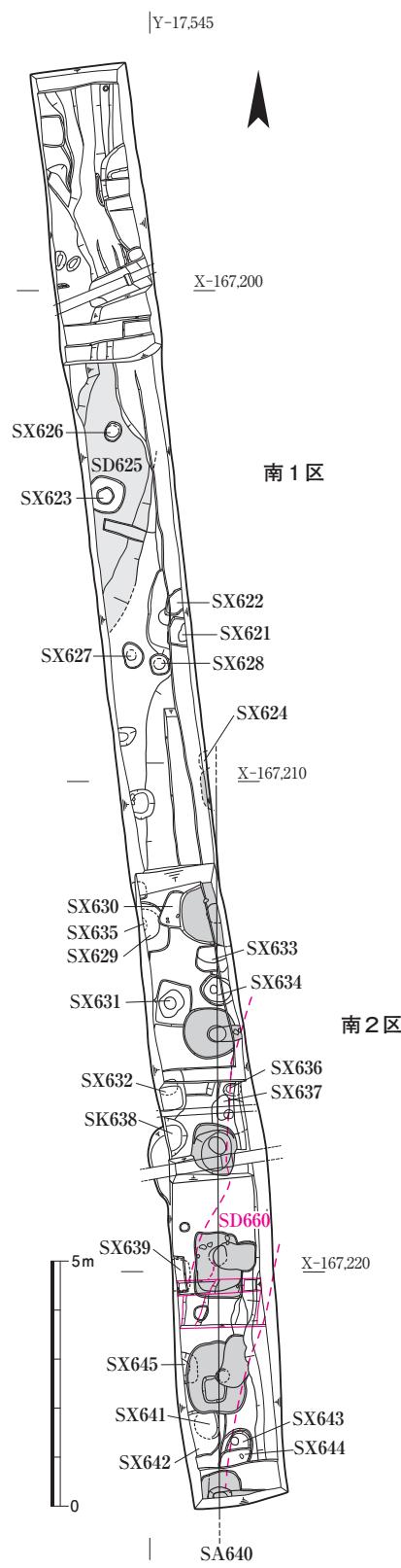


図115 南区遺構図 1:150

### 3 南区の調査

**基本層序** 上から①造成土、②7世紀代の整地土（暗褐色粘質土を基調とするが、新古2時期に分かれる）、③地山（橙色粘質土～花崗岩バイラン土）の順である。南区は日高山丘陵の南東端に隣接し、旧地形は南東に向かって大きく下降する。丘陵先端部にかかる南1区北半では丘陵斜面を水平に開削し、いっぽう、標高の下がる南1区南半から2区にかけて、整地土で斜面を埋め立てる。古代の遺構はその造成面上に展開する。

#### 南1区の検出遺構

**SD625** 南1区中央で検出した古墳時代の溝。検出長は約2m、検出面からの深さは30cm。調査区に斜行して検出され、また北側は後世の搅乱により失われているため、全体像は明らかではないが、本来は幅80cm程と推定される。5世紀末から6世紀後半の須恵器、および埴輪片が出土している。

**SX621** 南1区南半の東壁際で検出した一辺50cmの方形の柱穴。時期不明の土坑によって上部を削平されているが、整地土上から掘り込まれている。抜取穴の埋土には橙色粘質土が斑点状に混じる。掘方埋土から、須恵器杯G身の小片が出土した。

**SX622** SX621のすぐ北側で検出した一辺40cm前後の柱穴。SX621同様に上部を土坑により削平されており、深さ20cm程が残るのみである。出土遺物はなく明確な時期は不明であるが、7世紀代のもとみられる。

**SX623** 南1区中央で検出した一辺60～70cmの隅丸方形の柱穴。SD625の埋没後に掘り込まれている。深さは約90cmで、粘質土を5層ほど重ねて丁寧に埋め戻している。古代の須恵器片が出土したが明確な時期は不明。

**SX624** 南1区南半の東壁断面で確認した一辺50cm以上、深さ50cmの柱穴。南側をSA640北端の柱穴に壊されている。抜取穴埋土に橙色粘質土が斑点状に混じる点がSX621と共通しており、対となる可能性がある。

**SX626** 南1区中央で検出した径30～50cmの柱穴で、深さは約40cm。地山上で検出したため時期は明らかではないが、掘方の形状から中世のものと推測される。

**SX627** 南1区南半で検出した径40～65cmの柱穴で、深さは約25cm。SX626と同様に地山上での検出。掘方の形状から中世のものと推測される。

SX628 SX627の東側で検出した径40cm、深さ40cmの柱穴。同じく地山上での検出。掘方の形状から中世のものと推測される。

(廣瀬)

### 南2区の検出遺構

暗褐色粘質土による整地土上で柱穴群を検出した。柱穴の重複関係から少なくとも4時期以上の変遷がある。

SX629 重複関係の中では最も古い。東半のみを検出した。掘方は約1.1mで、深さ約1.3m。柱を南方向に抜き取り、抜き取り後に黄褐色砂質土（山土）で整地する。整地後に径30cmの小穴SX635が掘り込まれている。

SX630 重複関係からSX629より新しく、SA640より古い。深さ15cmと浅い。

SX631 SA640より古い。掘方は90×70cmで、深さ40cm。

SX632 東半のみを検出した。掘方は70～80cmで、深さ60cmである。SX629と同様に柱を抜き取った後に黄褐色砂質土で整地を施す。その後別の小穴が掘り込まれている。SX630・SX631とともに柱筋が揃う。この3基で建物または塀を構成する可能性がある。

SA640 南北正方位にのる柱穴列を6間分検出した。重複関係からSX630とSX631より新しい。柱間は2.3～2.6mである。掘方は一辺1.0～1.2mで、深さは60～80cmである。掘方の形状は北から2・3番目の柱穴が円形で、4番目の柱穴は正方形、5・6番目は長方形である。掘方の埋土は整地土である暗褐色粘質土と地山由来の黄褐色粘質土が混じり、掘方の最上層は黄褐色砂質土で埋める。柱痕跡から柱の太さは30～35cmに復元できる。東～北東方向に柱を抜き取り、抜取穴はいずれも炭混じりの灰色粘質土と黄灰色砂質土で埋められている。北から3番目と5番目の柱抜取穴に土器が廃棄されており、両者から出土した土器が接合した。出土土器から藤原宮期以後に廃絶したことが分かる。

SX633 重複関係からSA640より新しい。掘方は55×65cmで、深さ35cmと浅い。

SX637 重複関係よりSA640より古い。掘方が一辺約80cmで深さ70cm、北側に柱を抜き取る。

SK638 SX632より新しい。埋土は暗褐色粘質土ブロックを含む褐色砂質土で、炭片が混じる。深さ約30cm。埋土より須恵器直口壺が出土した。

その他の柱穴 組み合わせは不明だが、多数の柱穴を検出している。SX641はSX642より新しく、SA640より古



図116 SA640柱抜取穴土器出土状況（南から）

い。SX642とSX645は抜取穴に5cm大の礫が入る点で共通する。SX644はSX643より新しい。

SD660 整地土である暗褐色粘質土下で斜行溝1条を検出した。地山斜面を褐色粘質土で埋めた後に掘り込む。北で東へ約10°振れ、幅1.4mで深さ65cm。埋土は下層が灰色粗砂で、上層はオリーブ褐色細砂であり、かなりの水量があったことがわかる。遺物は出土していない。南の飛鳥川から取水した水を日高山東裾の地域へ流すための水路としての性格が考えられる。

## 4 出土遺物

調査区からは土器類、瓦類、木製品、炭片が少量出土した。遺構出土の土器を中心に報告する。

1～5は北5区出土。1は黒色粘質土層出土の杯A。口縁部が外方に開き、端部の巻き込みは弱い。2・3はSB614の南端柱穴出土。壺K（2）は小破片を図上で復元した。精良な胎土で東海産の可能性がある。4・5はSD620暗灰色砂質土層出土。杯B（5）は低い高台を底部やや内側に貼り付ける。底部はヘラ切り不調整。これらの土器は飛鳥IV～Vに位置づけられる。6は北2区SX610出土の杯G蓋。器壁が厚く、かえりも分厚く丸みを帯びる。7～9は南1区SD625出土。型式差のある杯H（9）・杯H蓋（7・8）のほか円筒埴輪片が出土した。10は南2区SK638出土の直口壺。11～22は南2区SA640から出土。11は北から3番目の柱穴掘方から、他は全て柱抜取穴から出土した。12・15はいずれも北から3番目と5番目の柱穴出土の破片が接合した。杯B（12）は細い二段放射暗文を施し、底部内面にラセン暗文を施

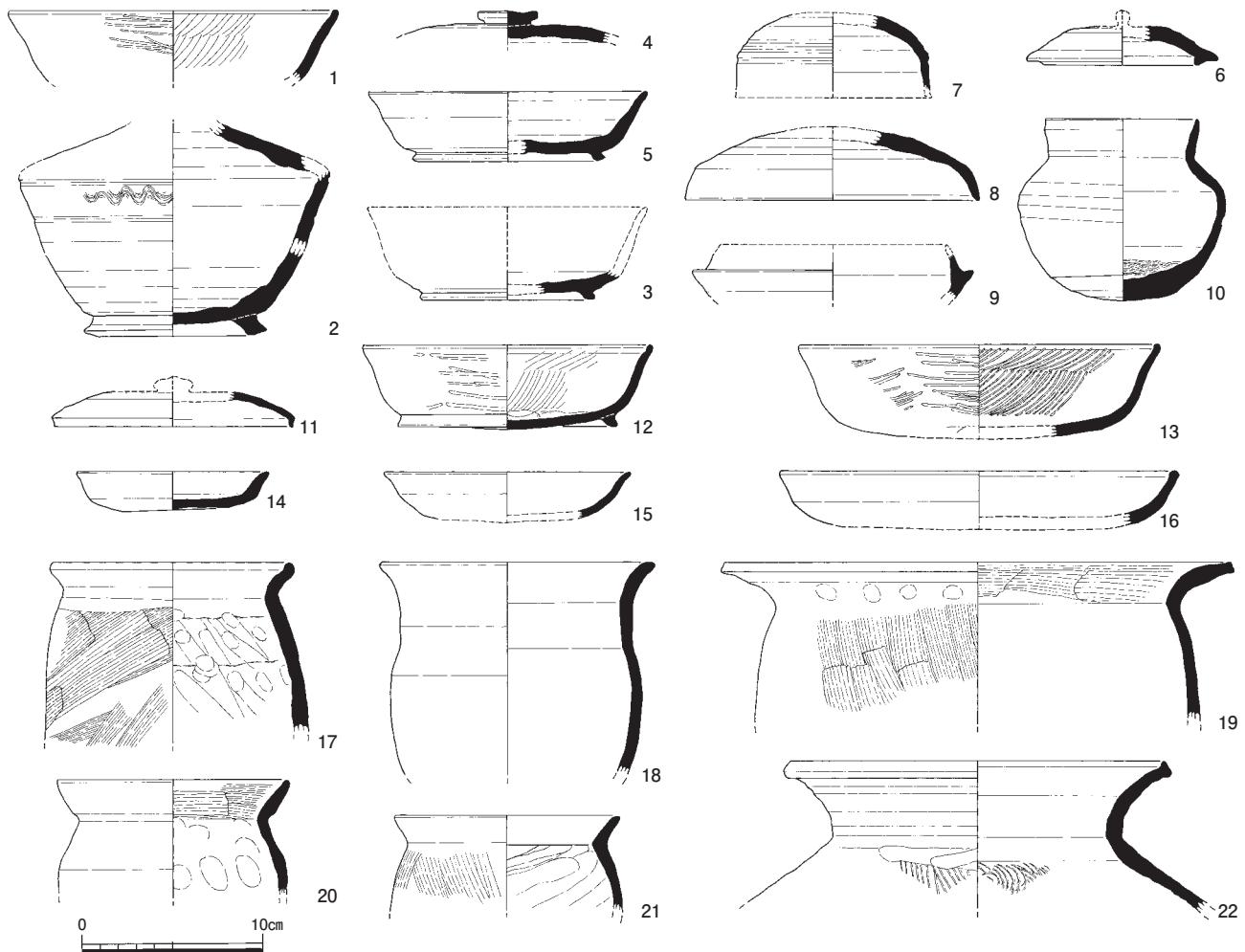


図117 第166次調査出土土器 1:4 (1・12~21:土師器、2~11・22:須恵器)

す。杯B蓋(11)はかえりがない。杯A(13)は二段放射暗文の下段が右斜め方向に傾き、上段の文様帶幅は狭い。14・15は杯G。14は胎土に雲母片を含み、15は微細な白色粒を含む。皿A(16)は器面の摩耗が著しく、暗文の有無・調整手法等は不明。甕C(17)は口縁端部を上方につまみ出す。内面に粘土紐の痕跡が明瞭に観察できる。胎土に赤褐色粒を含む。19は大和型の甕Cで、21は河内型の小形甕A。甕A(22)は口縁端部外面に面を持つ。SA640出土土器はいずれも飛鳥Vの特徴を示し、藤原宮期の遺構であることがわかる。

(小田)

## 5まとめ

北区では、大部分が既設管の設置範囲と重複しており、遺構および遺構面の残存状況は良好ではなかったが、建物2棟、溝1条、その他の柱穴4基を検出した。北2区の遺構検出面は、調査区北側に隣接する飛鳥藤原第115次調査区の検出面と層位および標高がほぼ一致しており、出土遺物からも概ね7世紀中頃から藤原宮期のものと理解できた。衛門府と想定されている遺構群との対応は、調査区間の距離がややあることから十分な検討を行うことができなかつたが、南へと7世紀代の遺構が確実

に展開する状況を把握することができた。また北5区で検出したSD620は左京八条一坊西北坪内の区画溝の可能性がある。このほか、明確な遺構検出には至らなかつたが、古墳時代以前の遺物も少量出土した。

いっぽう南区では、古墳時代の溝、7世紀代の柱穴、柱穴列、溝を検出した。古墳時代の溝SD625からは、5世紀末から6世紀後半にかけての須恵器・埴輪片が含まれており、西側に隣接する丘陵上に古墳が存在するか、或いはSD625自体が小規模な古墳の周溝である可能性が考えられる。7世紀代の遺構は、斜行溝SD660とSD660を埋め整地した後に展開する柱穴群がある。柱穴群は重複関係より4時期以上の変遷が確認できた。藤原宮期の掘立柱塹SA640は調査区東側に東一坊坊間路が想定されており、坊間路との区画塹の可能性がある。左京八条一坊西南坪の占地状況を考える上で重要である。今回あきらかになった濃密な遺構の分布は、当地域における活発な土地利用の過程の一端を示すと考えられる。特に藤原宮期の掘立柱塹と、それ以前の斜行溝、規模の大きな柱穴の存在は、藤原京造営前後における土地利用の変遷を示す可能性がある。周辺の調査事例の蓄積が望まれる。

(廣瀬・小田)